

October. 2005

Vol.1

—巻頭言—

「あなたがたの中に、あなたがたの知らない方が立っておられます。」

(ヨハネの福音書 1:26)



理事長 安藤能成

皆様のお祈りのうちに覚えていただいております「福音讃美歌協会」が7月18日、設立総会が開催され動きはじめました。

福音讃美歌協会準備委員会の段階からジャーナル発行、カンファレンス開催をとおしてすでに動きを進めてまいりましたが、正式に団体として立ち上げることができましたことを感謝とともに報告させていただきます。

本協会のこれからの取り組みについて考えますと、あまりにも多くの課題と求めがあることに気づきます。けれどもこの働きは私たちの人間的な要求のためではなく、礼拝の主体であり、この働きの目的である会衆の讃美をお受けになるただひとりのお方、主なる三位一体の神様のためであることを知るとき、私たちの能力を超え

たことを主ご自身がなさせてくださる、という期待に溢れるのであります。それとともに信仰と志を同じくする多くの方々が居てくださり、力を結集してくださるのでなければ全うできないと思われています。どうかこの働きに参加してください。

バプテスマのヨハネが紹介したお方、主イエス・キリストが今、私たちの中に立っておられるのを知ることとは何と力強いことでしょう。私たちはこのお方を救い主、真の牧者、王である祭司、永遠の神として知っています。しかしその全能の御力についてはなお知り得てはいません。この働きのためにどんな御力を現してくださるのか、期待に胸を膨らませながら前進したいと思います。

・福音讃美歌協会発足を祝して・

～21 世紀の日本宣教・教会形成に
寄与するため～

日本同盟基督教団
前理事長 赤江弘之

主の御名を賛美します。

私は、教会音楽に関してのみならず、音楽一般に関して素養のないものです。そのような私が、40 年近い牧会経験の中で考え続けて来た事の一つが、賛美歌のあり方です。それは、第一に、日本独自の賛美歌を生み出すことです。日本人の感性にあう、日本の教会から生まれてくる信仰の歌というべきものです。第二に、今の時代にふさわしい、若い世代に届く賛美が求められます。第三に、福音主義の教会が一つになって用いるものとなることです。今は無理であっても、今できる範囲の協力で始めなければ将来も期待できません。本来ならば 30 年～50 年前に手がけるべきことであつたと思います。しかしながら、過去を悔やんでも、過去の人々を、批判するだけで終わってしまいます。問題は、私たちのこの時代のなかで、精一杯のことをする責任が、私たちにあるのではないのでしょうか。幸い、優れた音楽家が協力して、出版社と共に協力しておられることを知り、教会の、教会による新しい、ビジョンによる取り組みを呼びかけました。幸い、私の所属する教団のリーダーが、共鳴してくださり、他の教派の先生方と共に、この計画が進められてきました。今はまだ少数の教派であっても、いずれ多くの教派の教会も加わって下さると信じています。「いのちのことば社」が全面的にご協力してくださり、この働きを

支えておられることに、感謝と、敬意を深く覚えています。働きが早く実現するために私は身を引いて、側面から祈り、応援する立場にさせていただきました。やがてできてくる賛美歌を手にする日を待ち望みつつ、できる限りの支援を惜しまないものです。安藤能成先生はじめ、ここまで準備してくださった方々に心からの感謝をお捧げします。全ての聖徒と諸教派・諸団体、諸教会、のご理解、ご協力を心からお願いします。それは、日本の福音宣教と教会形成、とりわけ礼拝の充実に大きく寄与すると堅く信じているからです。

V V V V V V V V V V V V V V V V V

～福音讃美歌協会に寄せる思い～

日本福音キリスト教会連合
前全国運営委員長 高橋和義

2005 年 7 月 18 日。設立総会開催をもって福音讃美歌協会の歩みが始まりました。讃美の的であられる主イエスに心から感謝し、御名を崇め、協会の今後に大いに期待するものです。

私は、立場上、最初の会合から加わらせていただき、協会発足の準備に携わる機会を得ました。そのお陰で、知識に乏しい者が、讃美歌に関係する諸課題と讃美歌集発行に伴う様々な必要事について理解を深めることが出来ました。今は新しく歩みを始めた福音讃美歌協会の

ために心から祈る者の一人です。

福音讃美歌協会の使命は、単に新しい讃美歌集発行に留まるものではなく、福音的立場に立って諸教会の讃美歌に関わるあらゆる課題に恒常的に取り組むことです。また、その働きは純粹に教会の営為として行われるべきものです。このような性格付けが協会発足の前に十分な時間をかけて確認され、ゆくゆくいささかのブレもないようにされ、その上に立って準備が進められてきたことを、私は感謝をもって証しいたします。

協会の前途を思うとき、理念の面で最初によき土台が据えられたことは実に幸いなことでした。経済的な必要をはじめとして多くの困難な課題も予想されることですが、私たちの主はご自身の御業として導いて下さいます。その事を信じます。「そこで、彼らはみことばを信じ、主への賛美を歌った。」(詩篇 106 篇 12 節)

出エジプトでの偉大な救出とイスラエルへの神ご自身の恵みと祝福に思いを馳せ、喜びにうち震えながら詩篇の作者は歡喜の歌を歌いあげました。神の御業は、それに与った者たちに常に新しい歌を歌わせます。みことばへの信頼を一層増さ

せます。

福音讃美歌協会の働きを通して、広くキリストの教会の中で「新しい歌を主に歌え」の祝福が広げられてまいりますように。



[後列左から] 井上、白石、鎌田、植木
[前列左から] 林、安藤

福音讃美歌協会理事会

理 事 長	安藤 能成	(日本同盟基督教団)
副理事長	林 桂司	(日本福音キリスト教会連合)
理 事	井上 義	(日本同盟基督教団)
	植木 紀夫	(日本福音キリスト教会連合)
	鎌田 雅人	(日本福音キリスト教会連合)
	白石 剛史	(日本同盟基督教団)
監 事	飯田 勝利	
	山田 洋一	
事務主事	安西 仁美	

福音讃美歌協会準備委員会 会計報告

2005年7月30日

旧福音讃美歌協会準備委員会

副委員長・財務担当 植木紀夫

福音讃美歌協会準備委員会は、同協会の設立に伴いその務めを終えましたので、ここに準備委員会の会計報告を致します。尚この会計報告は先に、福音讃美歌ジャーナル創刊準備2号紙上でご報告した中間会計報告分も含めた準備委員会の全活動期間(2004年7月1日～2005年7月18日)のものです。

[収入]

献金(37件)	¥484,081
計	¥484,081

[支出]

福音讃美歌ジャーナル発行諸経費	
(2回発行分)	¥176,040
カンファレンス関連諸経費	
(2回開催分)	¥90,956
福音讃美歌協会設立総会関連諸経費	
	¥31,010
アルバイト人件費	¥51,000
交通費	¥7,590
通信費(ジャーナル関連通信費を除く)	
	¥1,620
事務用品費	¥2,632
消耗品費	¥3,632
印刷費	¥5,580
会議費	¥2,842
支払手数料	¥880
計	¥373,782

[残高]

¥110,299

献金者名(敬称略)

(教会)

菅生キリスト教会、日本同盟基督教団、キリスト教朝顔教会、我孫子福音キリスト教会、都賀キリスト教会、北方キリスト教会、主都福音キリスト教会、菅キリスト教会、上作延キリスト教会、こどもの国キリスト教会、大磯キリスト教会、東村山キリスト教会、結城福音キリスト教会。

(個人・団体)

刑部照美、刑部吉重、斉藤眞木子、高橋和江、小見勲、三川献児、岩淵佳子、中山信児、中山和子、原京子、狩野和義、オフィスMANA。

(その他)

第2回カンファレンス席上献金

- 注1. 準備委員会会計は福音讃美歌協会設立総会(2005年7月18日)までの必要を扱っています。
2. 福音讃美歌協会設立以降、準備委員会郵便振替口座にご送金下さった献金は、福音讃美歌協会への収入とさせていただきます。
3. 準備委員会の当初予算は¥500,000でしたが¥110,299の剰余金が出ました。これは準備委員会が3回発行を予定していた「福音讃美歌ジャーナル創刊準備号」の発行が2回に留まったことによるものです。尚、剰余金は、福音讃美歌協会理事会の了承に基づき、福音讃美歌協会会計への収入として引継ぐものとします。

監査報告

福音讃美歌協会準備委員会会計処理につき、監査の結果、適正に執行され、運用、処理されているものと認め、ここにご報告いたします。

2005年8月22日

監事 山田洋一、飯田勝利

以上



2005年5月20日(金)開催
福音讃美歌協会準備委員会主催
第2回福音主義教会音楽カンファレンス・講演

～神殿礼拝における賛美～

歴代誌第二 5 章 1 節～14 節

日本同盟基督教団 和泉福音教会牧師
遠藤 嘉信

一祭壇の東側に立つ一

アサフ、ヘマン、そしてエドトンを代表として、その家族に加え、120 人の祭司から構成される聖歌隊とオーケストラは、祭壇の東側に立ちました。つまり、聖所の外の中庭に位置している祭壇の東側、或いは正面を向いて立ちました。もっと言えば、聖所の中庭に入る入口の近くに立って、いけにえを捧げる祭壇や聖所の神の臨在の方を向いて立ったということです。おそらく、それは、意識的に礼拝賛美の目的を明確に打ち出した表現ではないかと思われます。つまり、それは会衆を慰めたり、励ましたり、喜ばせるためではなく、また礼拝の雰囲気を高めるためでもありません。聖歌隊の使命は、専ら神をほめたたえることにありました。宣教学的な要請から、聖所の東に位置する入口に向かうというようなことをせず、あくまでも聖なる神に向かい、神礼拝のために聖歌隊が備えられていたということをこれは示しているのだと思います。

第一コリントの 14 章 24 節から 25 節に、「しかし、もしみなが預言をするなら、信者でない者や初心の者がはいて来たとき、その人はみなの方によって罪を示されます。みなにさばかれ、心の秘密があらわにされます。そうして、神が確かにあなたがたの中におられると言って、ひれ伏して神を拝むでし

よう。」とありますが、この御言葉にも宣教に関する重要なヒントがあるように思われます。

私たちが、教会の外に目を向けて、未信者を配慮しなければ、礼拝に招くことが出来ないとか、敷居を低くするために何らかの工夫を必要としているなどと考えることがどれほど必要なことでしょうか。この世と教会との間のギャップとか、世代の溝などというものを強く意識して、その橋渡しを、などと考えずとも、私たちが教会に導かれたことをも考えに合わせ、もっと主に委ねる必要があるように思います。神は、「わたしに近づくものによって…自分の聖を現し、すべての民の前で…自分の栄光を現す」と言われたお方です。「わたしはある」と言われた神は、自存の神であると言われます。ご自分で存在され、ご自分でご自分の栄光を現されます。

求められているのは、他の人を意識して後ろを向いたり、脇を見たりせずに、正面に臨在される聖なる神の前にひれ伏し、真直ぐに主に向かって賛美を捧げることです。礼拝賛美は、宣教学的にというよりもまず礼拝学的に考えられなければならないということでしょうか。そして、そのことが礼拝者の一致にも深く関係してくると思われるます。

一まるでひとりでもあるかのように一

120人の祭司がラッパを吹き鳴らしました。金管楽器、弦楽器、打楽器、そして聖歌隊を加えた古代のオーケストラが、その歌声を、文字通り「一つの声」として響かせていました。それは、ある意味、私たちが交読文を読んだり、主のいのりを共に祈ることに通じるところがあるかもしれません。

原文は、「主をほめたたえ、主に感謝を捧げる目的で、一人の人のように一つの声で聞こえさせた」と読むことができます。会衆として主をほめたたえること、感謝を捧げること、ここには信仰共同体としての御霊の一致が意識されています。アーメンという言葉は厳粛です。御言葉の前に会衆がアーメンと告白することができるとすれば、それは御霊の御業です。同じ信仰を共有することのできる恵みを思います。聖霊が豊かにご支配くださっています。

主を礼拝する場所が整い、礼拝者が心をつにして神に感謝を捧げ、神をほめたたえていることを、レビ人や祭司たちが音程やリズムをもってまで表現しようとしていたと考えたらそれは感動に包まれます。技術以前に、信仰の一致が問われているのです。大勢なのに一人のように唱和しています。それぞれに異なる声と楽器、そして異なる個々の存在であるのに、一人の人のように、神に感謝し、神をほめたたえます。

そして、それと共に、私たちがいろいろであることを主は喜んで下さいます。けれども、本質において一致しています。それは、第一義的には、感覚的、感性的な一致ではありません。律法の理解、聖書の理解に基づく一致です。賛美の歌詞が陳腐な神理解ではなく、本当に練られた聖なる神を相応しく表現するものでなければ、私たちは一致して賛美することができません。神を知る知識の一致、神学的な理解の一致、

教理の一致が求められています。それこそが公同性とも言えるものです。牧師や説教者が御言葉の深みを知り、それを説き明かすことができても、結局陳腐で、軽率な賛美によってそれが還元されることを良しとしたら、どうなるだろうかと考えさせられます。

だからといって、最大公約数を探し出し、一致できる範囲の賛美を作り上げようとする、安易なエキュメニカルな賛美は、聖書が教えていることでも、奨励していることでもありません。それは例えば詩篇を見ればよくわかることです。詩篇は徹底的に神について知り得うる全ての御業と神ご自身をほめたたえようとしています。神に遠慮していただいて、割り引いた賛美することなどあり得ないことです。

そして、その意味で、神の御言葉そのものである聖書の教えにしっかりと根ざして、神を愛し、そして隣人を心から愛することがなければ、真の意味での礼拝に繋がりません。認罪と悔い改めに伴い、罪をあがなわれ、新生した者たちであることが前提となります。それ故に、神の赦しを知る者となり、和解の恵みに与っています。こうした人々は、聖なる神の恩寵を喜び、御言葉を愛し、真の信仰を共有しつつ、心をつにして主を拝します。そのことが賛美の姿勢に現れるということではないでしょうか。私たちの会衆賛美によって神の民の内的調和が見事に表明されているとしたら、それこそ主がもっとも喜ばれることであると信じます。

あるいはそれ以上に、この歴代誌家が、そのことを驚きをもって書き留めているように、この一致は、聖なる神ご自身が備えてくださったアーメンの一致であることを思われるのです。人々が一致を求めたのではなく、聖なる神に向かう一人一人を神が御主権をもって一つに合わせくださったということです。そのことをこの著者が感動的に記しているということでもあると思います。



会衆讃美と讃美歌のこれからを考える札幌セミナー

日 時: 2005年10月14日(金) 15:00～16:30

場 所: 北海道聖書学院(札幌市白石区北郷1条3丁目1-61)

講 師: 植木紀夫(桜美林大学総合文化学群講師、キリスト教朝顔教会音楽主事)

内 容: [講演]『会衆讃美の歴史と展望』

[報告]福音讃美歌協会について

[質疑]

主 催: 教会音楽札幌セミナー準備会

《準備委員》

八尋 勝(北海道聖書学院長、JECA・札幌聖書キリスト教会)

遠藤 稔(単立・東栄福音キリスト教会)

朴 永基(同盟基督・新札幌聖書教会)

下川友也(同盟基督・日高キリスト教会)

菜花 香(北海道聖書学院講師、JECA・栄福音キリスト教会)

共 催: 福音讃美歌協会

お問い合わせ: 北海道聖書学院 電話 011(871)7892



第1回福音讃美歌協会教会音楽セミナー

講 演

『これからの会衆讃美一過去に学びつつ』

～講 師: 井上 義～

&

ワークショップ

『さんびか伴奏のあれこれ』

ーオルガン・ピアノ・リードオルガン、さんびか作品の種類の違いを念頭にー

～講 師: 植木 紀夫～

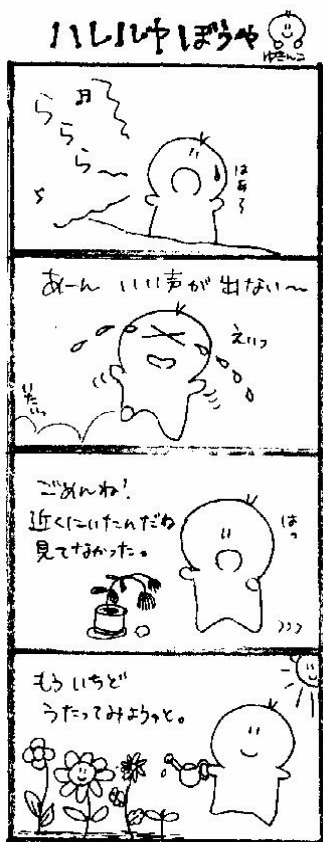
日 時: 2005 年 11 月 25 日(金) 19:00～20:45

場 所: 日本同盟基督教団 **世田谷中央教会**(世田谷区桜新町 1-14-22)

主 催: 福音讃美歌協会

お問い合わせ: 福音讃美歌協会 Email: info@jeacs.com

電話 03-3428-2388(世田谷中央教会)



=入会方法=

会員の種別は正会員(教会・教団・教派等)、準会員(各個教会、団体等)、賛助会員(各個教会、個人等)の三種類です。

賛助会員につきましては、入会申込書をご請求いただき、郵送又はFAX送信していただく、もしくは下記ホームページより入会申込みに必要事項をご記入の上、送信していただくことにより入会することができます。

正会員、準会員につきましては、協会へ直接お問い合わせください。入会のしおりを郵送致します。

『福音讃美歌』編集後記
 ジャーナルが一新しました。今回は、福音讃美歌協会が正式に発足し、第一号の転、第一号のなつたわけです。
 設立総会、新委員の決定、いよいよ次の段階へと進み始めたとこの感じがします。
 どうぞ、期待してください。
 いそいで、お祈りください。
 い。日本の教会
 熟し、ひいては、日本中の
 は、日本の神様
 人々、美しう
 れる人を賛美する
 ます変えよう

会計報告

(2005年7月19日～9月30日)

収入	会員年会費	310,000
	献金	23,000
	準備委員会残金	110,299
	収入合計	¥443,299

支出	理事会費	18,078
	委員会費	2,000
	事務費	54,608
	人件費	83,000
	支出合計	¥157,686

残高 収入－支出 ¥285,613

【会員年会費】日本同盟基督教団(正会員)、
いのちのこば社(準会員)

【献金】札幌希望の丘教会、
橋本キリスト教会

感謝とともにご報告いたします。

会計 鎌田雅人

振替口座

◆郵便振替口座◆

番号 00220-1-95127

名称 福音讃美歌協会

◆郵便貯金口座◆

番号 10500-82654721

名称 福音讃美歌協会

◆銀行口座◆

みずほ銀行 ユーカリが丘支店

普通預金 口座番号 1604668

名称 福音讃美歌協会

福音讃美歌協会 (JEACS)

〒154-0015

東京都世田谷区桜新町 1-14-22

日本同盟基督教団世田谷中央教会内

TEL 03-3428-2388

FAX 03-3428-2380

福音讃美歌ジャーナル Vol.1

発行者・安藤能成

編集者・林 桂司

URL <http://www.jeacs.com>

E-mail info@jeacs.com